

協同の心づけ

連載企画 私の職場の「協同労働」

「清掃作業員」 から 「病院環境アドバイザー」 へ

～ センター事業団 倉敷事業所「水島協同病院」から～

矢吹美樹（センター事業団）

昨年4月から新清掃方式にとりくみ、9月には清掃改革完成宣言をした岡山事業所。その中の現場のひとつ、水島協同病院現場はこの1年半で大きく変わった。その1年半の軌跡の中には、多様な「協同の関係」をつくり、「協同労働」の実感と喜びを自らの成長の糧とする組合員の姿がある。4月26日、水島協同病院現場を訪ねた。（矢吹）

毎日点滴を打ちながら...

3月末、岡山事業所・守本洋二副所長から「水島協同病院現場で病院環境を一緒に考えるアドバイザー的な役割を期待されている。契約更改をしようとの話を病院からいただいた」と書かれた週報が本部に届いた。

水島協同病院現場でこの一年、どんなとりくみや働き方・変化があったのだろう。

4月26日、昼休みの団会議で、新清掃にとりくんできたこの1年をふりかえってもらった。

「最初のころはワイパーを使うときの力を入れ具合が分からなかったりして、肩や腕など筋肉痛になりながらの作業だった」とほとんどの人が声をそろえて言う。

はじめたころは毎日点滴をうちながら仕事をしていたと言う三宅二枝さん、「でも、今日患者さんから言われたんですよ。『こんなにきれいなら、毎日清掃しなくてもいいんじゃないか』って。だから、ちょっと汚いんですけど、掃除したあとの汚れたクロスを患者さんに見せて『こんな汚れやほこりが、今までは患者さんの口の中に入れてたんですよ。だから目に見えないけど、掃除しないとね』と答えたんです。そしたら、『そうか。それはありがとう』って患者さんから言われて、『やって良かった。もっとがんばろう』って思いました」とニコニコしながら応えてくれた。「ほこりが患者さんの口に入らないし、ぬれたモップでふかないので、患者さんが滑らなくなって良かった」と長尾智枝さん。

現場責任者の山本カツミさんは笑いながら言う。「いろんな所で言ってますけど、私が新清掃をやるうって思ったのはカートがほしかったからなんです。それまで、モップを入れたバケツやホウキ、モップの柄を抱えるようにして院内を移動していたのが、カートにきちんと道具を積んで移動するようになったら、まず職員や患者さんの見る目が「プロなんだ」というように変わりましたね」。

「腰にさしたピカリットのスプレーをサッ

ととって作業しているところを見た患者さんが、『カッコイイ』って言ってくれた時はうれしかったよな。がんばろーと思ったもんな」と岡久雄さんが言えば、「そうそう」という笑い声がおこる。

新清掃を導入するにあたっては、CDCガイドラインの資料を職員に渡し、新清掃の考え方や方法についても婦長さんや現場の看護婦さんなどに説明し、理解を得ながらすすめてきた。

出口の見えない課題を背負って

清掃という仕事へのやりがいや自信を語る組合員たちだが、つい1年半前までは解決の出口が見えない課題を背負って、契約の継続をあきらめていた状態があった。

水島協同病院現場では清掃の他にも、月々定額で害虫駆除の仕事を受けている。清掃そのものへの評価は低くはなく、契約解除の話は出ていなかったが、ゴキブリがいなくなれないということが10年来解決できない課題だった。

それまでは、定期的に薬剤散布をする方法だったが、薬剤を使っただけでは、耐性を持ってどんどん強くなるゴキブリのいたちごっこだった。いなくなるゴキブリに、病院からは害虫駆除業務は別の業者への委託を検討するという方針を伝えられた。

「清掃がきちんとされていないからゴキブリが出てくると見られているようでしたし、害虫駆除がよその業者にとられれば、その業者は当然、清掃業務も含めた建物総合管理の提案をしてくるだろうと思っていました。だから、自分たちの仕事がなくなるかもしれないという気持ちでしたが、どうしていいのか

分からず、もうあきらめていました。」と山本カツミさんは当時をふりかえる。

それが、労協クラブに加入している(株)キャッツ(床下環境整備や害虫駆除を行う企業)との提携による作業改善で、ゴキブリはほぼ出てこなくなった。

「ほんとに見かけなくなったよな。前は、病室で寝てる患者さんの横を這っていったりしてたもんな。」「いなくなったよな」と組合員が口々に応える。

「子どもの日の出勤は配慮しないと」と

この1年半ほどの仕事の水準の向上が評価されて、病院の担当者からは「契約書・仕様書を現状を反映させたものにしよう。契約金額もそれをもとにして改定を検討しよう」と言っていただけだ。

自分たちの作り上げてきた実績で、10年以上できなかった契約改定が実現できそうな可能性が拓け、組合員の顔は明るい。「そりゃ、うれしいよな。ずっと上がらなかった時給も上げられるかもしれないし」という声もあちこちから出てくる。

こういった成果もさることながら、病院職員との信頼関係が育ち始めていることがとてもうれしいと山本カツミさんは言う。

「それまでは言われるばかりでしたから、びくびくしてたんです。でも今は、『何かあったら病院と相談しながらやろう』と思えるようになりました。先日もゴールデンウィーク中の出勤日について病院担当者と相談しているとき、『小さい子どものいる組合員が、子どもの日に出勤しないといけないのはかわいそうだから、配慮しないと』とってくださいました。そんなふうに私たちのことを

1・2・3 運動でも

この組合員の仕事への自信と誇りは、今年の1・2・3運動でも成果を生んだ。

知り合いから事務所清掃の依頼を受けてきた内海省三さん、「通院している病院の院長に会ってもらえるようにしてきたから、今すぐ行って」と守本副所長を引っ張っていった三宅さん。組合員自身の行動で、小さいけれども仕事拡大につながった。

今、若手組合員の山本葉奈美さんが守本副所長と共に、契約更改のための資料作成にとりくんでいる。改築・変更部分の清掃は、10年以上変わっていない仕様書には反映されていない。それを契約に反映させるには、図面で一つ一つ確認しながら清掃方法や頻度を決めていかなければならない。地道でいいいな実務作業が必要になる。これまでは事務局がやるのが当たり前という雰囲気だったこれらの実務を、共にこなせる組合員も生まれてきている。

お互いの悩みも相談できるように

他の現場の組合員との関係も変わってきた。

山本カツミさんは言う。「前は、近くにある健寿協同病院の現場に私が行くと『何しにきたん。探りにきたんか』って言われたり、いつも張り合ったりして、深い溝があったと思います。仲が悪かったんです。それが今は、普通に話ができるし、お互いの悩みも相談し合えるようになってきました。玉島協同病院現場には、今まで休日の定期清掃に水島から行っていました。形の上では、助け合っていたと言えるのかもしれませんが。でも、どんな

に自分の現場の定期清掃が予定通りすすんでいなくても、行かざるを得ないということで「玉島の現場は、なんで自分たちでやりきらないのか」という不満がいつもありました。玉島の組合員の中にも、そのことへの負目のようなものがあたんじじゃないでしょうか。関係はギクシャクしていましたね。」

それが、岡山事業所の全現場が新方式にとりくみ、完成宣言をして大きく変わった。一つ一つの現場がプロとしての自覚と自信を持ち、「自分たちのことは自分たちでやりきろうと自立してきたことが、この組合員同士の関係の変化を生んでいるのではないか」と守本副所長は言う。

さらにプロとして、そして地域へ

とは言え、病院からの要望がなくなったわけではない。

担当者の浅間さんからは「苦情があっても、すぐに対応してくださるので安心していきます。立体面がきれいになったのは良かったです。今後は、誰がやっても同じ水準になるよう、一人ひとりの技術のレベルアップが課題になるでしょうね。また、例えば、ゴミが落ちていたら自分の持ち場でなくてもすぐ拾うとか、素手で対処できないものはすぐに担当の人に知らせるとか、そういったことを組合員がお互いに言い合える関係をもっともつつくってほしいですね。トイレを常に清潔に保つことも、引続きの課題ですね」という要望が出されている。

しかし、そこには、以前のような「いつもいつも叱られて、常にあやまってばかり（川原所長）」という関係は見られない。病院環境を守るパートナー・プロという評価に裏打ち

